

## 46 年間お世話になりました

野木 靖之

元 理工学部教授・理工学部校友会 顧問

(物理学科：S38 年卒)

(物理学専攻 博士前期課程：S41 年修了)

私が物理学科に入学した 1959 年 4 月に 6 号館はまだなく、建設用地の奥に原子力研究所（現 量子科学研究所）の施設である核融合大実験室が建っていた。勿論、9 号館はなく、5 号館との間には個人の屋敷があった。1961 年 6 月に 6 号館が竣工し、地階と 4、5 階が物理学科および原子力研究所の研究施設と居室、1～3 階が理工学部図書室として利用が始まった。建物はコンクリートの柱や梁が外に突き出た頑丈一点張りの構造である。屋上にはホイストクレーンを水平に移動させるレールが建物の外まで伸び出し、その下には吊り上げた重い実験装置を出し入れするためのベランダ状の小さなデッキが各階に設けられていた。毎日見ていたので建物のたたずまいが気になったことは無いが、駿河台地区の雰囲気からは相当かけ離れていると学生達は感じていたに違いない。このような地味な外観とは異なり、内部にはプラズマ観測用の高速度カメラや超伝導研究に必要なヘリウム液化装置など建設当時から最先端の実験機材の数々が稼動していた。

私は 6 号館に卒業研究から大学院までの学生生活の 7 年間、その後の教員生活の 39 年間をお世話になった。近年の 6 号館は高層ビル群に囲まれ、天気の良い日でも建物に陽が差す時間はわずかである。南側にあった中央大学が移転する迄は、居室の窓に一日中陽が差し込み、冬でも寒さ知らずであった。12 時になるとニコライ堂の鐘がお昼を知らせてくれる。実験を中断して歯学部の地下食堂や中央大学の生協食堂へ食事に出掛けたことを思い出す。建物についての思い出はまだ沢山あるが、6 号館で多くの学生を指導し、原子力研究所の研究を推進した吉村先生と安河内先生を忘れることは出来ない。吉村先生は日大で核融合研究を進める傍ら日本のプロジェクトとしてトカマク型を推奨し、現在国際共同研究で進められている ITER 計画への道を拓かれた。安河内先生は日本の超伝導開発を先頭に立って推し進め、トカマク型の超伝導コイルや現在試験運転が行われているリニア新幹線は先生の先駆的な研究が基になっている。

6 号館跡地に建てられる新校舎によって理工学部がますます活性化し、発展することを願っています。